AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2013.03) 平成23年度:45.

皮膚筋炎に進行がんを合併した患者の退院支援(第二報)合同カンファレンスの成果と課題

澤田裕子、笹田豊枝

皮膚筋炎に進行がんを合併した患者の退院支援（第二報）
合同カンファレンスの成果と課題

7階西ナースステーション、緩和ケア診療部　　〇澤田　裕子、笹田　豊枝

【目的】

在宅療養に移行する患者の退院支援には、病棟内、院内、地域の多職種との連携、協働が必要である。皮膚筋炎に進行がんを合併しながらも、在宅療養に移行できた事例を経験した。退院支援の一環としておこなった多職種との合同カンファレンスの成果、課題について検討する。

【研究方法】

事例研究

1）対象：皮膚筋炎に進行がんを合併したA氏に関する看護記録。

2）データ収集･分析の方法:診療録より、合同カンファレンスに関する記録を抽出し、考察した。

3）倫理的配慮：A氏の遺族に研究目的、方法等について、口頭と書面で説明し、協力は自由意志に基づくこと、個人情報の保護を保証し、書面で同意を得た。

【結果】

退院日仮決定から退院までの11日間に、緩和ケアチーム(以下PCT)とは直接ケアや家族への指導方法、達成目標について、MSWとは退院後の診療体制、社会資源活用についてカンファレンスを行った。また、PCT、主治医とのカンファレンスでは、このまま絶飲食が続くのかという患者の発言から、嚥下機能と誤嚥リスクを再評価した。嚥下造影検査にて不顕性誤嚥を認めていることがA氏と家族に説明され、飲食によって誤嚥性肺炎を起こすよりも食べられなくても自宅に帰ることを優先したいとA氏と家族は意思決定した。

一方、地域との合同カンファレンスには、訪問看護師、訪問診療医、PCT、MSW、主治医、病棟看護師が参加した。カンファレンス内容は、①主治医からの病状説明、②ケア、医療処置に関する指導内容と到達度、家族の理解や受け入れ状況、③介護申請と訪問看護の頻度、内容、④疾患経過、予後についてのインフォームドコンセント内容、⑤介護用品のレンタル、⑥薬剤処方、医療材料の購入、⑦急変時対応、後方ベッドの保証、⑧退院日程等であった。A氏、家族の心理面や病棟での指導に関し訪問看護師から質問を受けたり、逆に、在宅療養で可能なことや困難なことについてその場で確認できた。カンファレンス後、カンファレンスで検討された内容をA氏、家族に伝えるとともに、訪問診療医を病室に案内し、紹介した。

【考察】

合同カンファレンスの目的は、支援の方向性を一致させ、目標、ケアや処置の方法を確認し、継続した医療・介護を受けられるように調整すること[1)]といわれる。合同カンファレンスは、退院前に病棟でしなければならないこと、自宅で訪問看護師が行えることを明らかにし、支援の方向性や目標を確認することにつながった。紙面の看護依頼書が一方的な情報提供であるのに対し、顔と顔を合わせた情報・意見交換は双方向のコミュニケーションとなり、安心して看護を依頼、引き受けることにつながったと考えられた。

合同カンファレンスを開催し、どのようなことが退院前に医療者間で話し合われ、引き継がれているのかをタイムリーに患者、家族に伝えられたことは安心感につながった。さらに、継続先医療者と入院中に患者、家族が顔を合わせたことが、在宅療養に対する不安軽減や信頼関係づくりにつながったと思われる。療養の場所がどこであろうと、患者、家族が安心して生活できるような支援が看護師に求められる。このような連携を積み重ね、広い地域における顔の見えるネットワークの構築が今後の課題である。

【結論】

合同カンファレンスにより、支援の方向性や目標の確認ができ、医療者のみならず患者、家族の安心感につながった。顔の見える連携を目指し、ネットワークの構築が今後の課題である。

【引用文献】

1）小野塚美香：退院調整時のカンファレンスの活用と実際、看護実践の科学 34(8)、p.6-13、2009